

リエゾン心身処方学の方法と概念

On the Method and Concept of the Liaison Approach for Psychosomatics

丸 山 久美子*

Abstract

This paper presents a proposal on the concept and method of the liaison approach for psychosomatics, including philosophy and spirituality in human mind. We can also study in another aspects, for example in clinical developmental psychology and liaison nursing in terminal patients or disorder of mind of child. Moreover, these idea constructed in Kanazawa University, so-called “United Graduate School of Child Development”, majoring child psychology. We can discuss those problems of liaison approach for psychosomatics in methodological point of view.

Keywords : liaison approach, good enough holding, consultation, liaison psychosomatics

はじめに：

リエゾン心身処方学 (liaison approach for psychosomatics) は文字通り、人間の身体的側面と精神的側面に生ずる何らかの病理現象を適切に処置し、処方するには、どのような方法があるのかを精神医学やその他の周辺医学、看護学、心理学の各専門分野から提案した方法を厳密な方法でつなぎ合わせ、ひとつの学問体系を構築してゆく新しい学際研究である。医学分野では一人の患者を治療する場合にチームを組み、お互いに意思疎通を確かなものにしながら治療してゆくのだが、このことは、現代医学の知恵を駆使しながら円滑な処置方法を編み出してゆく方法のひとつである。今日、多くの原因不明で治療困難な現代病が発生し、従来のように単純な方法で治療することに困難が生ずるようになった。患者中心主義を標榜したときから、患者の中に生じているさまざまな心理的要因を処方する方法も単に臨床心理学や精神医学だけでは解決不能な場合がある。たとえば、今日、最もユニークな例として、順天堂大学医学部附属順天堂医院では「がん哲学外来」、金沢大

学病院では「子どもの心の診療科」などの特設外来を開いている。前者を担当する医師は基礎医学から先端医療技術はもとより、多くの医学的知識や臨床を踏まえた上で、患者の心と向き合うための哲学、心理学、文学にいたるまでのさまざまな教養を身につけた教養人であり、れっきとした臨床医師が担当する。「がん哲学」とは、がんや死という避けることのできない問題と真摯に向き合い、それぞれをその中から見つけ出してゆく姿勢をさす。順天堂大学医学部の教授で病理や腫瘍学を担当している樋野興夫教授は長年発ガンの研究をしてきたが、教授は医学的研究にとどまらず、癌とは何かを考え続け、一般向けの講演会などで話しているうちに、がん細胞が増殖し、命を蝕む病気となることを知ることは、社会のあり方や一人ひとりが自分の生き方や考え方を考えることにつながると感ずるようになった。このがん外来ががんについて落ち着いて考える時間を過ごすきっかけとなってほしいと彼は願う。こうして、従来の医療に風穴を開けたいと外来開設に踏み切ったという。今日、国内外において、このようなケースは一例もない。ここに、重要な哲学的テーゼは科学としてのがん学（がんとはいかなるものか）を学びながら、がん哲学的な考えを取り入れてゆ

* Kumiko MARUYAMA
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
臨床発達心理学 行動計量学

く領域としての「がん哲学」である。そこには「考え深い沈黙と真摯な魂と輝く目が要求される。この風貌こそ、現代に求められている「がんに従事するものの風貌である」と樋野教授は言う。又、このような概念は、イギリスの児童精神医学者ドナルド・ウィニコットの being、doing に類似した概念である。樋野教授は「何かをなすまえに、(to do)、何かである (to be) ということを考えよ」ということが大事だという。ウィニコットは子どもがひとりになれるのは常に母がそばにある being からである、つまり、「子どもは母のいるところでしかひとりになれない」という。この being の大切さは母と子のかかわりの重要な要素であるが、癌哲学の根本思想も同様に to be であることから出発することにあるといえるだろう。

現在、癌に罹患して余命を宣告され、ホスピスなどで死を待つ人達が多く存在する。さらに、癌を一度発病して、それ以来いつ又再発するか分からず漠然とした不安の中に存在する人々は人口の3分の1は存在する。癌哲学外来はそのような人達の実存的苦悩や痛みを理解し、人生を語り、人間に関する存在の意味を知るためのトークを行うのである。全国に唯一つしかないこの外来に集まる病院は全国からやってきた患者で満員である。人々は何かしら人と人生を語り、人間の何たるかを語りたいという欲望に悩んでいる。その受け皿になるためのリエゾン心身処方学者の要請が今こそ望まれる所以である。

又、子どもの心の診療科には小児内科の医師が中心になって、精神科医、臨床発達心理士などが協力し、現在子どもたちの心に起こっているさまざまな病気と丁寧につき合う。この診療科設置の経緯は平成17年から平成19年の3年間、厚生労働省からの研究助成によって研究された総合研究報告書に詳しい。「子どもの心の診療に携わる専門的人材の育成に関する研究」と題する研究テーマは日本子ども家庭総合研究所所長の主任研究官である柳沢正義氏による一連の研究結果を踏まえて設置されたものである。分担研究者には、児童心理学、教育心理学、臨床心理学、小児医学、看護学、精神医学、福祉、リハビリテーション、教育学の専門家がリエゾンして研究された。子どもの心の荒廃が問題視される中、その診療に対する

ニーズが増加した。その一方で、それに対応する専門的人材が不足していることが指摘された。これらの要請を受けて、この研究は子どもの心の診療に関する望ましい医療システム、関連職種の教育研究システムの提案と実践を目的として研究された。その結果を踏まえて、金沢大学病院に子ども心の診療科が設置されたわけで、児童精神医学が中心となって、子どもの発達障害、精神障害、睡眠障害、排泄障害、摂食障害、その他の思春期に起こるさまざまな心身症、不登校、被虐待児へのメンタル・クリニック、気分障害、統合失調症、慢性身体疾患のある子どもへの心の治療、親を失った子どもの対象喪失、問題のある子どもを取り巻く家族への心理的支援などを多くのリエゾン心身処方的手法を用いて子どもの心の診療科という新設外来が出来上がったのである。そのほかにも多くの病院に特設外来が設置されているであろう事は予想できる。この診療科設置とあいまって、子どもの発達障害がどのような原因によるものであるかを大脳生理学的実験研究が同時並行的に行われた。高機能広汎性発達障害の子どもが年々増え続け、現在100人に1人～2人の有病率であるという。今、なぜ発達障害が注目され、発達障害者支援法案が成立し、少子化時代の社会的問題として注目され、「脳の発達障害」としての認識が定着しつつあり、大規模な研究が始まった。自閉症の発生は男女差があり、男児に多く、女子との対比は4:1である。高機能発達障害の発生は脳に微細な傷があってその結果、発症することが理解されたので大脳生理学が一躍研究の俎上に上った。それによればもし障害があれば、3歳以前に障害が顕在化する。なお、これは遺伝的要素が多く、1卵生双生児は80%以上の確率で発症する。同胞内での発症率は2.4%である。そこで、金沢大学では3,4歳の子どもを集めて、その行動評価と認知機能検査、MEG(脳磁図)測定とNIRS(近赤外線スペクトロスコピー:脳表面の血流を光で捕らえ、脳活動情報を画像化する)を実施する計画が着手された。外からは見えにくい原因を早期に発見できるように新しい技術を開発している。その一環として心身ともに健康な子どものデータを必要とするために3歳から4歳の子どもの被験者を募っている。

リエゾン心身処方学は臨床発達心理学を基本に据え、小児医学や児童精神医学、看護学、ならびに哲学一般の専門家が集まって、乳幼児から高齢者にいたるまで生涯発達心理学の特別研究を行うことを意図している。

心身処方学概念

最も古い心理学書であるといわれるアリストテレスの「靈魂論（デ・アニマ）」では、人間のここは人間の身体における精神であるとした。それによれば、感覚・運動などを支配する精神は動物的精神、成長を促す精神は植物的精神、頭脳の発達を促進する精神を人間的精神といい、身体における精神（靈魂）を3つの要素に分けた。身体は素材であり、精神は形相である。つまり、身体は彫刻の素材となる大理石であり、精神はそれを刻んで作られた像であるから、身体と精神は不可分に結びついている。「仏造って魂入れず」とは、昔から諺にもあるように、単なる器ならば誰にでも作れるが、そこに心魂を入れるためには並大抵のことではないほどの努力と信念が必要である。そのための修行を多くの陶工や仏師は行っている。このように、今日の心身症発生のメカニズムは遠く遙か昔のギリシャの地で栄えた哲学者アリストテレスの心身一体論に依拠している。しかも、今日の人間の精神構造は複雑化しているが故に身体構造に生ずるさまざまな現象も複雑化しており、従来のように単純に測れない要素を多々含んでいる。しかし、哲学者ヘーゲルも言うように、「魂はロゴスに従う実体である」という定義にもとづいて構成されたさまざまな概念は、よくよく考えてみれば、アリストテレスの「靈魂論」にその基礎を置いている。ヘーゲルの精神哲学には、本質的な目的は、精神の認識の中へ再び概念を導入し、そのことによってアリストテレスの「靈魂論」の意味を再び解明することであると述べている。ギリシャ哲学が現代哲学の基礎をなすように、これらの哲学体系は中世にも引き継がれ、最も心理学的な哲学はアウグスチヌスの宗教経験に対する深い内省的洞察、キリスト教神学を体系付けたトマス・アクィナスの心理説が注目されている。しかし、心理学そのものは最も俗的なものであり、世俗的な神学の一部でしかなかった。アリストテ

レスの哲学体系は第1哲学として形而上学、それに続いて自然哲学、論理学、精神哲学であり、心理学は最後の精神哲学として「世俗的な神学としての心理学」を代表し、高邁な哲学者達は興味をもたなかった。靈魂は目に見えないものであり、神もまた目に見えない崇高な存在であったにもかかわらず、人間が有する魂の哲学は俗的なものであり、ほとんど興味の対象からはずされていた。しかしアリストテレスは今日でも通用するような現代心理学の魁として、科学的心理学の基礎を作ったのである。ともあれ、身心一体であるから体に病巣が生ずれば、心もまた同じように痛み続ける。現代病でもある「心身症」は心を病んで、頭や内臓に支障を来し、長い間通院しなければならない。アリストテレスの「靈魂論（デ・アニマ）」には、具体的な心理的事実の記述が多く見られる。彼自身はギリシャ哲学者であり、自然科学の祖、または科学的心理学の祖といわれている。当時の哲学全般は自然科学も含めてすべからず自然哲学、哲学的心理学など哲学それ自体が学問の体系である。アリストテレスが、現代の科学的心理学の基礎を築いたその根拠は、具体的な心理的事実の記述が多く見られるからである。心理現象はおおよそ経験的であり、知識および観念の源として感覚器官を重んじ、観念の再生と連想によって説明し、連想は経験の接近、類似、対比によって起こるという連想の3原則を設けており、後の連想心理学の基礎に多くの貢献をした。キリスト教以降から中世にいたるまで心理学はパウロの霊肉の思想である宗教的靈魂論、アウグスチヌスの宗教的経験に対する内省的観察、12、3世紀において、アリストテレスの再発見からキリスト教神学思想を体系付けたトマス・アクィナスに見る宗教的思索に属するものである。この状況は文芸復興期を境に驚くべき変化を見せる。天文学においては天動説から地動説を唱えたコペルニクス、その数学的証明を行ったケプラー、実験を行って証明したガリレオ、ニュートン、生理学では血液循環の事実を発見したハーヴェーなど、それまで哲学の中に分類されていた科学は全て独立した。心理学はそれに遅れること1世紀近く、19世紀の末、ドイツの生理学者ブントの心理学実験室の創設まで哲学の中からは脱し得なかった。その間、精神

哲学といわれた心理学は近世哲学の祖であるデカルトに始まり、かつ、イギリスの経験主義哲学者ロックはその著「人間悟性論」において、こころは生まれたときは白紙（タブラ・ラサ、tabula rasa）であり、経験によってさまざまな色がつくという「観念の連想」の章を加えた。これはアリストテレスの連想学説が復活したことを意味する。イギリス心理学はここに大きな発展を促された。ドイツでは意識的経験を観察によって若干の種類に分け、それぞれ独立した精神能力の作用に原因があり、こころはその能力の束であるという能力心理学が起こっていた。哲学者カントはこころは認識・感情・欲望の3能力から成り立つとして、ゲシュタルト心理学（知覚統合への焦点化）の先駆者となり、イギリスやフランスとは一味異なる心理学発祥の土壌を創ったのである。このようにこころの科学はイギリス、ドイツの典型的な哲学者の思惟するところであり、近代心理学に多く影響を与えたが、さらに生物学の分野でダーウインの「進化論」が圧倒的に心理学研究に影響を与えた。すなわち、ダーウインの進化論は人間と他の動物との隔たりを縮小し、発達の見地から動物心理学、児童心理学、民族心理学の発展を促進した。特にダーウインは人と動物の表情の研究、嬰兒の発達観察録を顕著にして、ブントの実験心理学に多大な影響を与えた。かくして、哲学から独立した心理学はその源泉をアリストテレス、ロック、ヘーゲル、カントの経験主義的哲学に端を発し、ダーウインの進化論によって肉付けされたのである。

こころをめぐる人間の探求は現代において大脳生理学、基礎医学などの先端医療技術の開発によって、なお発展しているが、それらの源泉はすべからず哲学と生物学に由来すると考えても過言ではないであろう。

リエゾン心身処方学は主に、医学・看護学・心理学の3分野連合のコンサルテーション・リエゾンを基礎におくが、その根底をなす概念構成は図1に示すように哲学、形而上学を中心にすえる。生物学は医学一般の中に入る。哲学や形而上学は医学・看護学・心理学の実践活動を支える支柱となり、さらにその周辺領域は生命倫理学や宗教学、および家族関係、生活習慣である。現実の生活空



図1 リエゾン心身処方学概念図

間の中では、三角形を取り巻く領域が最も重要で具体的な働きをなすものとする事にしてしよう。

リエゾン心身処方学の方法

今日の社会はもっぱら子どものこころの充実を図るための方策が多岐にわたって作られている。たとえば、少子化問題が高まるにつれて、老人介護などの福祉分野ではこれまでの社会構造を順当に推進してゆくための方法を見失い、新たな考えの下に少子化と社会福祉政策が構築されなければならなくなった。人間の知的・身体的・情緒的発達はその時代の特徴を反映し、これまで考えられなかったような社会現象、少年の無差別殺人、モンスター・ペアレントと呼ばれる自己愛人格障害者を増産している。このような時代を反映してわれわれが取り組まなければならない多くの新たな方策を構築するにはどうすればよいのであろうか。子どものこころのゆがみがいかなるところから発生するかに関する研究は多々あり、これまで多くの理論が喧伝されていたが、それは学問的研究分野の仕事であり、現実的課題とかけ離れていた感が否めない。

今日になって漸く、現実の場でそれらを大きく取り上げ論ずることができるようになった。それは、社会の構造が変わり、さまざまな刺激がそれとなく人間の精神に影響を与えるようになったからである。人々の関心は「食べること」に向かい、グルメ志向が強くなると、それらは食べ物に対す

る興味を別の視点に置き換えてしまうような結果を生むようになった。たとえば、偏食や肥満が子どもたちの間に蔓延し、高血圧の子どもが存在するというこれまではあまり考えたこともなかったような事態を招いている。これまで子どもは感染症や栄養障害で死亡することが多く、今日ではそれらは克服され、幼児の死亡率は最も低く、昔ならば助からない命でも助かるような先端医療技術が発展した。しかし、今日、子どもにとっても最も過酷な事態は「こころ」の問題である。子どものこころの診療科が総合病院の中に設置されるに及んで、いかに子どもが病んでいるのか、その原因は何かを発見する事が急務となった。子どものこころは成人の心とは異なる。原因はただひとつであり、それは他領域の要素を少しずつ混合した広範囲なものである。子どもの発達には母子(父子)関係、家族関係によって大きく影響される。子どもを健康に育てるのはただそれのみに尽きるだろう。母は子を good enough holding (ほど良く抱きかかえる) しながら育てる。それだけのことで、全てのこどもは健康な大人になるのである。それでは母(父)はそのために何をするのであろうか。愛情という名の無私のこころを子どもに与え続けることが重要である。果たして親は子どもに対して無私の心を注ぐことが出来るであろうか。今日の時代は個性化の波によって従来のように子どもにばかり注意を注ぐことがなく、それに耐えるこころを失った親、自らの欲望によって子どもの運命を自分の掌中に収めたいという願望が強い親が出現するようになった。最も重要な子どもの発達の過程で親の子に与える愛情の性質によって、子どもの人生はどのようにでも変動するのである。知能指数は遺伝的特質が8割であるが、性格は5割の遺伝と5割の環境である。子どもは親を選べないから、その親の素質で育つが今日では環境的要因の大きさが知能構造にまで及んでいる。そこで、このような問題に対してどのような対策や処方となされるであろうか。子どもの問題に限って考えてみよう。今日、自閉症やアスペルガー症候群などの高機能広汎性発達障害、反社会的人格障害の子どもたちが増えている。何が彼らをそのようにしてしまったのかを解決するには、これまでのように小児内科、幼児発達心理学、小児栄養学

などの分野だけではまかないきれない問題が多い。又、少子化社会の中では、量産された高等教育の場としての大学には、従来のように心理学や児童教育学や小児内科学などの分野だけでは処理しきれない問題が多々存在する。しかも少子化社会では量産された大学に多くの子どもを集めることが困難となってしまった。そこで、これらの対策のために、各大学が分担しながら子どものこころの裏に存在する社会認識生物学、対人関係支援学、分子生物学、身心処方学など新たな研究分野をひとつの大学ではなく多くの大学が連合して研究し学ぶ場を作ってゆくという手法がとられつつある。もはや、ひとつの大学で現代社会認識問題の本質を探ることが出来なくなったのである。子どものこころの背後にある社会認識問題の本質とは分子生物学、脳画像(大脳生理学)、社会心理学、臨床発達心理学的研究を融合した教育研究を行う場を、横に広がった大学組織が分担しつつ、こころの相互認知科学講座を組織するのである。たとえば、すでに各分野の大学院修士課程を修了した人がさらに博士課程に進み、連合小児発達研究科で研究活動して、小児発達学博士を取得して現場に帰り、その知識を生かすべく社会に貢献するという組織が大阪大学大学院大学、金沢大学、浜松医科大学で行い、それぞれの大学がこの組織の分校となる。金沢分校では「こころの相互認知科学講座」、大阪分校では「こころの発達神経科学講座」、浜松分校では「心の発達健康科学講座」をそれぞれ担当するという具合である。リエゾン心身処方学はこのような他科学分野との相互作用から「こころの病」の原因を究明してゆくためにいかなるべきかを、多くの他分野の研究者との共存によって研究し処方するものである。これまでの学際的研究とは異なり、こころの領域(身心医学)に絞り込んで心身の病を処方する技法を開発する。単に子どものこころの病のみならず、青年、成年、老人の心の病を取り上げ、生涯発達心理学の立場から問題を論じてゆく。

ちなみに、幼児児童教育学科と社会福祉学科とがともにリエゾン心身処方学において連携し、人間の一生を QOL や QOD を測定手法にしながら、ともに研究してゆく連携組織が主要である。それが長い歴史を有する北陸の地で、ただ一校だけキ

リスト教精神を守り、他の類推を見ない「魂」の教育を行っている「ミッション」の特徴である。この特徴を北陸の地に広めることが、仏教王国である北陸の地にキリスト教の種をまいて育てた先達への熱い感謝の思いである。彼らの深い教育の理念は、今も絶えず大きく成長し、124年の間に成長した樹木のもとで学ぶ若人の声は活気に満ちている。21世紀、荒廃した若人のこころを健全なものにするべく、この地において教育に携わる教師もまた、高い理想を持って邁進するべきであろう。

おわりに

21世紀は人が幸福を求めて様々な探究の中から、最も優れて価値あるものを見出して行く世紀である。そのためには、「幸福」とは何であるのかという課題をギリシャ哲学の幸福主義の根底から発見してゆくことが肝要である。人間は誕生した時から思惟する動物として養育される。パスカルの「人間は考える葦」に象徴される広大な宇宙観を抱き、蒼穹の彼方に、なお、広がる悠久の宇宙をしばし眺める時間を有するところから、これまで課題とされてきた「心の病」を処方する英知が生まれ、自己の存在の確実性を認識するところでこの病から開放されるのである。「人間の本性は全知全能ともいえるべき能力と崇高な人格を有しているにもかかわらず、幸福否定を願う内部の心は、それを極力否定し、それが意識に上らないように万難を排して努めている（笠原、2004）」という説もある。それが人間を幸福から遠ざけ心身症の源泉になるというのである。それゆえにもな

お、そうした不可知論や虚無主義、否定主義、悲観主義にとらわれることなく、蒼穹の空を見上げ、その奥に存在する更なる至高の存在に目を凝らし、己のうちに内在する疑惑の目を出来るだけ遠くに投げ捨てて前進しようではないか。

<参考文献>

- 1) 村田孝次 1987 発達心理学史入門 培風館
- 2) シュルツ, D.1981 (村田孝次訳) 現代心理学の歴史 培風館 1986
- 3) 丸山久美子監修 2009 今日の生涯発達心理学—自分の人生を設計する— アートアンドブレイン
- 4) 丸山久美子編著 2008 21世紀の心の処方学—医学・看護学・心理学からの提言と実践— アートアンドブレイン
- 5) 丸山久美子 2005 臨床社会心理学特講—人間関係の社会病理— ブレイン出版
- 6) 丸山久美子 2007 医療心理学特講—生と死の心理学— ブレイン出版
- 7) 今田 恵 1952 心理学史 岩波書店
- 8) アリストテレス (山本光雄訳) 靈魂論 1968 岩波書店
- 9) スィーガル, J. 2004 (祖父江典人訳) メラニー・クライン 誠信書房 2007
- 10) ボウルビー, J. 1980. (黒田実郎、吉田恒子・横浜三恵子 共訳) 母子関係の理論 I,II,III, 岩崎学術出版社 1981
- 11) ウィニコット, D.W. 1965 (牛島定信訳) 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社 1977
- 12) アクリル, J.L. 1980 (藤沢令夫、山口義久共訳) 哲学者アリストテレス 紀伊国屋書店 1985
- 13) 杉山登志郎 辻井正次 編著 1999 高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症— ブレイン出版
- 14) 笠原敏雄 2004 幸福否定の構造 春秋社
- 15) リード, E.S. 1997 (村田純一、染谷昌義、鈴木貴之 共訳) 魂から心へ 青土社 2000